

きのこ・かび 関連図書の紹介

吹春 俊光

入手できた菌類関連の本を発行順に紹介します。

「冬虫夏草の謎」

著者：盛口満，出版社：丸善出版(株)，2013年10月30日発行，231頁，ISBN：978-4-621-08791-6 C0040，1,800円（＋税）

2006年に、どうぶつ社、から発行された本の復刻。最近、タイをはじめとするアジア地域で、ますます研究がすすんでいる冬虫夏草。この本の著者も2009年に「冬虫夏草ハンドブック」（文一総合出版），という名著を出し、冬虫夏草へ、ずんずん、と、のめり込みの様子。健康によい、金儲けのニオイがする、ということとは真逆の、生物多様性・博物誌的な冬虫夏草の本。

「キノコの歴史」

著者：シンシア・D・バーテルセン，翻訳：関根光宏，出版社：原書房，2014年1月22日発行，184頁，ISBN：978-4-562-04977-6 C0022，2,000円（＋税）

本書はリンゴ，牛肉，茶，パン，ケーキなどがタイトルとなった食べ物シリーズの1冊。著者は、翻訳本によれば、食物と調理の歴史研究家と紹介がある。きのこをめぐる文化誌的な知識が、ちりばめられており、あつ、と、思う内容も盛りだくさん。たとえばイントロのところで紹介された、G. ワッソンの「きのこ嫌い・きのこ好き民族」には元ネタがあったという話。また、「イングランド南東部サセックスの伝統的な木製かご」の写真（翻訳本35頁）。また、その写真の下には、「ハンガリーのキノコ好きのあいだでは、朽ち木に寄生するキノコから採れる海綿状の物質で作ったマッシュルーム・ハットを愛用する人がいる」との紹介が。これは小林義雄先生が紹介されていた暖皮のことかな（この原稿の最後の方にある根田先生の御著書（47頁）にも暖皮の帽子が紹介されています）。こんな具合に、



いたるところに、ものすごく気になる小ネタがふんだんにちりばめられており、あまり体系的ではないけど、はばの広い話題が盛りだくさんで、きのこ食文化好き・きのこ文化好きの人は1冊持っていてよい本かもしれない。巻末の謝辞をみると、本書の作成にあたって、大学図書館のスタッフや、複数名の植物病理学者の協力を得て本書がつけられたこと、そしてきのこ専門家であり植物病理学者のお父上に原稿をすみずみまでチェックしてもらった、と書いてあり、ちょっと納得。そして御母堂は、考古学博士なのだそうである。印象的な図と写真は「パリの洞穴からキノコを収穫する様子」の図(113頁)、と「四川省成都市にある〜中略〜会社のマッシュルーム選別工程」(145頁)の写真で、マッシュルーム栽培がフランスから世界の隅々まで広がり、西洋とアジアの食文化と食品産業の交流がうかがえる写真である。しろうとが書いたきのこ本だろうとおもって、手にとったのだが、情報量はかなり多く、良書というべきかもしれない。ちなみに通販サイトによると元の英語の本は送料込で約1600円で手に入る。装丁は元の本の方がおしゃれ。

「きのこ旅」

著者：とよ田キノ子，出版社：グラフィック社，2014年8月25日発行，127頁，ISBN：978-4-7661-2704-1 C2026，1,500円（＋税）

《食べて、観て、泊まって、買える“きのこツーリズム”のススメ》と副題にあるように、女子による、副題のと通りの、日本列島きのこ巡礼ガイド。三部によって構成され、第一部では、たとえば「きのこ王国 長野をめぐる大満喫プラン」として、食事、宿、美術館などをめぐる旅が提案されている。あの名宿「ペンションきのこ」は“自然の中でのアクティビティが楽しめる宿”と紹介され、泊まったことのある旧世代の人は、女子好みのステキな宿の写真に、やや戸惑ってしまうかもしれないね。光るきのこの旅プランや、天才南方熊楠を訪ねるプランもあり、旅行会社が企画したら、どんな人が参加するかな、と楽しみなものもある。「きのこ界のレジェンドを訪ねる」として、世界に誇る「種駒種菌法」を発明した森産業（今号の会社訪問旅漫画参照）もとりあげられ、「きのこ茶屋」、「椎茸神社」、「森喜作の銅像」など、日本のきのこ史をたどる正統な旅プランの紹介もある。第二部は、女子がきのこ狩りにでかけたら、の実践ガイド。第三部は、お部屋にどんなきのこグッズをかざりましょうか、その買い物ガイド、となっている。



女子好みのイラストも多い。監修者として、国立科学博物館の保坂健太郎さんのエッセイのおまけつき。

「毒きのこ - 世にもかわいい危険な生きもの」

写真：新井文彦，監修：白水貴，構成・文：ネイチャー＆サイエンス，発行所：(株)幻冬舎，2014年9月20日発行，80頁，ISBN：978-4-344-02640-7 C0072，1,200円（＋税）

写真のことについて，少し感想をのべてみる。私が博物館に就職した頃の1988年に出版された「日本のきのこ」（山と溪谷社）に掲載された伊沢正名さんの写真は，広角で森全体をとらえ，しばった写真で，画面のすみずみまでピントが合っており，きのこが生息する環境と，その姿（傘の裏や表まで）を明瞭に映し出し，科学的で，きのこ写真のスタイルとして一世を風靡した。とにかく，伊沢さんのきのこ写真は画期的で斬新，革命的だったのである。21世紀となり，それに対して，違った作風のきのこ写真ものが出版物として世にでるようになった。一つは白背景のきのこ写真で，ボタニカルアートの絵を描くように，白い画面に科学的に形態を正確に見せる写真。そしてもうひとつは，本書に頻出する写真のように，背景をぼかしたりして，森の中に色がうかびあがるように撮った写真である。色や形がおもしろいから，典型的でない個体だけれど，撮ってみました，と言えなくもないきのこ写真。このような写真を撮る人は，分類のためにというより，自然の中のとてもし綺麗な色の生物と出会って，その生物を森の中から切り取ってきました，というかんじで撮っているのかもしれない。いじわるな見方だと，傘の裏が不鮮明，子実体が幼菌すぎで同定できない，あるいは，種の特徴をまったくあらわしていない，などの理由で，普通の図鑑写真だとほとんど没になるようなものばかりである。でも世間的には，このようなものが好まれているらしい。検索すると「写真の美しさが群をぬいている」，「眺めているだけで楽しい」と書き込みがある。評価されているのである。私は，どんどん，ずれているのである。

ということで，本書はそんな風情のある写真で毒きのこを“めぐる”本です。解説も，野暮な図鑑のように形の記載じゃなくて，もっと読みやすい風に書かれている。7つのコラムも意外な情報も盛り込まれおり楽しい。不満があるとするとするなら，やっぱり写真の同定が，いまひとつな点か。ヒカゲシビレタケ，ネズミシメジ，ハイイロシメジ，スギタケ。どれも，ほんと？かな写真でした。毒きのこを真面目に調べようとしたら，決定版の「日本の毒きのこ」（学



研)で調べてください。

「菌類の生物学-分類・系統・生態・環境」

企画：日本菌学会，責任編集：柿島眞・徳増征二，発行所：共立出版(株)，2014年9月25日発行，473頁，ISBN：978-4-320-05732-6 C3045，5,300円（＋税）

日本語で菌類全体を概観する本は，ありそうで，手頃なものはなかなか無かった．たとえば「ウェブスター菌類概論」（1985，講談社サイエンティフィク，1979年の第2版の翻訳，線画がすばらしい，今見ても名著），「菌類の生物学-生活様式を理解する」（2011年，京都大学学術出版会，翻訳，21号で紹介）等．その後，「菌類・細菌・ウイルスの多様性と系統」（裳華房，2005年）が，分子系統の結果を日本語で読め，日本人による書き下ろし本として貴重だったが，やはり分類が主眼におかれたものだった．そして，昨年の2013年日本菌学会から「菌類の事典」（朝倉書店，23000円＋税）が出た．分類から文化まで，掲載された領域はひろく，日本菌学会が自慢できる画期的なものだったが，価格と本の重さでも，大変なものだった．そして，とうとうおなじく菌学会から出た本がこれ．筑波大学系の先生方が執筆陣の主軸となり，分野は副題にあるように，かなり広い分野の最新情報が読み物にちかい形で手に入る．第一章の徳増先生の地球規模の視点からみた菌類の概説は，数頁だが，すばらしい．4章の細胞・成長の部分，小野先生によるもので，ここだけでも菌学概論の雰囲気である．植物と菌類（7章），昆虫と菌類（9章）も充実している．そのあと，栄養，医薬品，食品製造，文化財など，菌類が関与する話題と適切な執筆陣を配し充実した本となっている．初学者にはちょっとむづかしい部分もあるかもしれないが，章や節ごとに，必要なところから読めばよい．価格は高いようにおもえるが，内容を考えると安価である．おすすめです．

「きのこミュージアム」

著者：根田仁，発行所：(株)八坂書房，2014年9月25日発行，295頁，ISBN：978-4-89694-179-1 C0045，1,800円（＋税）

2003年に出了「きのこ博物館」の改訂版．ただの改訂ではなく，著者によれば内容が倍増しているという．レイアウトも，今回の改訂版がぎゅっとつまった感じで読みやすい．根田さんのすごいところは，凡百の類書の蘊蓄部分が，そこはかとない孫引で書かれているところを，根田さんは



オリジナル原典をみずから発見し、原典をちゃんと読んで紹介しているところ。すなわち、元ネタがあるようなものがなく、自分で見つけてきたもの、あるいは根田さんが研究している内容を、紹介しているところ。それでいて、こんなに（見て頂ければわかるのですが）面白そうな内容が、豊富にでてくるところがスゴイ。根田さんは、興味がひろすぎて、きのこに注ぐ人生の時間は3%くらい、と本書にも写真で登場する人に、いわれたりもするのですが、この本は、その興味の広さが、よい方向に出たもの。例えば、あの田中延次郎が野球狂で豪腕の持ち主で、暴漢に竹刀で叩かれたとき、しかえしに野球のボールをすごいコントロールで投げつけた、なんてエピソードは、初めて聞く話。そんな深々としたしょうもないエピソードが、本書の、シイタケ、マツタケ、ハツタケ、ツキヨタケ、ナメコ、ヒラタケ等の、本当に本格的な学名紹介物語にでてくる。これらの著名菌群は、もちろん国の林業試験場研究者の立場で、本業として調査・研究されておられるのですが、その仕事ぶりが綿密詳細。タイプ標本をたしかめに、いろいろな国々の標本庫を訪ねたり、ふるいふるい古今東西の文献を調べたり。3回違った学名で記載されたことがあるというツキヨタケにいたってはなんと学名の話だけで9頁。よみすすめるうちに、学名をつけるルールが、初学者にも、おのずと了解できていくところも、すばらしい。この学名のところだけでも、本書を買う価値があります。そして、博物館職員の私からみると、とにかく、掲載されている図版類もすごいです。登場する菌学者の御尊影もちゃんと探し出して見せてくれています。根田さんは、きっとサービス精神に満ちた方なんだろうね。読みやすく、情報満載で、お買い得です。

「われわれはきのこである」

かんきょうかがくえほん 10月号 第32巻7号, 企画・構成・レイアウト: La Zoo, 写真: 大作晃一 (シイタケを含む野生きのこ), 山本明義 (栽培きのこ), 発行所: (株)学研教育みらい, 2014年10月1日発行, 27頁, 410円

「あんだんて」(かんきょうかがくえほん 10月号付録) 第9巻7号

きのこを宇宙人にみたと、未知の生物にその正体を説明してもらうようなストーリー仕立ての絵本。定期購読していないと手に入らないようです。大判の図鑑で、見開きで大作さんのきのこ写真が堪能できる。8-9頁, 12-13頁の、シイタケが開き胞子を飛ばすまでの連続写真は、ほんとう



にすばらしい。シイタケは千葉県大多喜町の入口昇さん栽培のもの。このシイタケは最新のデジカメ写真だが、18-19 頁の養生ヒトヨタケがフィルムであることを思っていると、デジカメが高精細であることをしみじみと感じる。付録の、ご両親のための「あんだんて」というリーフレットにはわたしが解説を書いています。

「ベニテングタケの話」

著者：堀博美，発行所：(株)山と溪谷社，2014 年 12 月 5 日発行，205 頁，ISBN：978-4-635-51008-0 C0275，880 円（+税）

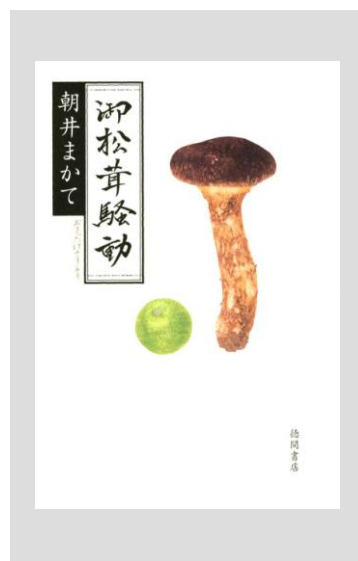
「きのこる」（2010 年，山と溪谷社）の著者による蘊蓄本。ベニテングタケでなんと 200 頁分語る。きのこに詳しい読者には、ご存じの内容も多いかもしれない。私がもっとも、興味をもったのは、ベニテングタケを実際に食した著者のオリジナル部分（172-174 頁）。わたしは、ベニテングタケはちょっと酔っ払ったようになるけど、とても美味いきのこだとおもっていました。信州きのこの会の長老が「ベニテングタケは炊き込みご飯に最高！」とも言っているし、実際 2 本ほど食べたこともあるけど、そんなに変にはならなかった。でも、本書には、「テレビの光がまぶしい」「深い眠りについた」「友人が窓から飛び降りそうになった」と書いてある。類書に、幻覚をおこすきのこのひとつにベニテングタケが引用されることもあり、わたしは、それは、シビレタケ系の中毒のまちがいだと、おもっていたけど、認識をすこしあらためないといけなそうですね。



「御松茸騒動」※おまつたけそうどう

著者：朝井まかて，発行所：徳間書店，2014 年 12 月 31 日発行，249 頁，ISBN：978-4-19-863888-7 C0093，1,650 円（+税）

きのこが登場する小説は、飯沢耕太郎氏による「きのこ文学名作選」（港の人）、「きのこ文学大全」（平凡社）などで紹介されている。しかし本書は、あのマツタケが主役で登場するサラリーマン小説風の物語。時代は江戸中期の宝暦、江戸で生まれ育ち、江戸が勤務地である尾張藩士、榊原小四郎が主人公。自他ともにみとめる切れ者の主人公は、不本意ながら「御松茸同心」を命じられることになり、父親の故郷である尾張に異動となりマツタケ担当職員となる。マツタケは贈答品として重宝され（この本の中ではそのような設定となっている）、毎年一定量の、しかし莫大な量のマツタケを尾張から調達するのが慣例となってお



り、それが小四郎の任務なのだ。だがいろんな理由で山の手入れがなされなくなった尾張のアカマツ林は、マツタケの発生に適さなくなりつつあり、不作の年が続き、毎年業者からの仕入れでしのいでいる。そしてその仕入額は莫大な借金となっているのだが、様々な利権や上役の意向もあり、その習慣を改めることもできない。デスクワークが得意で、完全な文化系の、しかしながら藩の財政再建を真面目に夢見る主人公は、マツタケの本当の姿（菌類であること、林内にコロニーをつくること、そしてマツと共生していること）をつきとめ、マツ林の里山林としての再生に取り組むことになる。自然誌の目からみても、それほど破綻のない筋立てで、面白く拝読することができました。

「マトからみたきのこたち」

著者：北川公子，発行所：GINZA HAKKO 木の香，2015年2月10日発行，24頁，500円（＋税）

銀座のウッドバーニングの小物を売るお店で、2015年2月、マトリョーシカに描かれたきのこに注目した展示会が開催された。そのときの展示解説書。結構読み応えがある。マトリョーシカというものの起源は箱根の入れ子細工にあり、歴史的には結構あたらしいものである、ということをおは私は今回はじめて知った。これまで、マトリョーシカに、きのこが描かれていることも、わたしは不勉強で知らず、また、描かれたきのこ図像がここまで読み解けるものとは知らなかった。三度びっくり。まず、マトリョーシカに描かれたきのこの種類をとおしてロシアの自然を解説。続いて、ともに登場するモチーフ、バーバ・ヤガーという山姥、レーシィという精霊、ハリネズミのなどにも注目し、ロシアの民俗や自然観まで読み解いていく。途中、きのこ初心者むけに、きのこの暮らしぶりの解説もあり、後半は日本のきのこけしの紹介へと続く。展示をご覧になった方は、マトリョーシカもさることながら、日本の豊富なきのこけしコレクションをみてびっくりされたかもしれない。今回の展示のためになんと16枚の絵葉書まで店は用意したのです。収集する、という行為が、なにをもたらすか。私は博物館にいながら、あらためて考えなおしてしまった展示でした。その片鱗がうかがえる解説書。本書は、書店での購入はできません。銀座へ行ったおり《木の香》（きののか）（東京都中央区銀座7-10-5 ランディック第3銀座ビル）を訪ねてみてください。絵葉書は1枚100円＋税。

